

児童心療センター（旧市立札幌病院静療院児童部）  
存亡の危機を憂える

社団法人 日本自閉症協会 会長  
元市立札幌病院静療院児童部 医長  
山崎 晃資

最近の新聞報道やインターネットの記事で「札幌市児童心療センター（旧市立札幌病院静療院児童部）が存亡の危機にある」ことを知り、さらに、12月1日に北大で「札幌市児童心療センターの存続を求める緊急集会」が開かれるというニュースをみて、なぜこのような事態に陥ったのかと驚くとともに、絶対に「静療院児童部の灯火」を絶やしてはならないという強い思いを持って、この手紙を書き始めました。

旧市立札幌病院静療院児童部の歴史は、北海道における自閉症児の教育と療育の歴史そのものです。昭和40年、北大教育学部の伊藤則博助手（当時）や文学部の仲間の協力を得て、老朽化した北大幼稚園を期限付きで借り、今でいうデイケアをはじめることになりました。まさに五里霧中の毎日でした。昭和42年には、私たちの療育指導は大きな暗礁に乗り上げていました。ちょうどその頃、未熟児網膜症が社会的な問題となり、熱心な盲学校の教師たち（前東孝儀・高橋渉・高橋晃先生など。今ではいずれも故人となってしまいました）に頼まれて視覚障害の乳幼児の指導場面として北大幼稚園を提供することになりました。視覚障害の子ども達から多くのことを学ばせてもらい、ある意味で私たちの自閉症の療育指導技法開発の出発点となりました。

昭和49年、全面改築された市立札幌病院静療院児童部に北大幼稚園で頑張ってきた仲間と共に移り、開設準備のために半年前に赴任していた設楽雅代先生、太丸リツ婦長、川守田京子心理士と共に「のぞみ学園」をオープンしました。のぞみ学園は、第一種自閉症児施設となり、経営費の赤字分は札幌市の一般会計から補填されることになりました。まさに先駆的な試みでした。

全道各地から集まってくる自閉症児のために、外来部門では「グループ指導」を行い、病棟では試行錯誤の入院治療がはじまりました。激しく動き回り、ベッドの上でジャンプを繰り返し、窓や壁に椅子や積み木を投げつける子ども達によって、半年分の修繕費が瞬く間になくなってしまったこともあり、経営的にも何度も危機的状況に追い込まれ、当時の静療院院長の佐々木高光先生や石坂直巳先生と激しく議論したこともありました。入院治療は試行錯誤の連続でした。グラウンドの片隅にあった老朽化した木造の建物を利用して分教室を作りました。分教室の教師と病棟勤務者の自然発生的に生まれた連携なくしては、自閉症の子ども達の療育指導や教育は成り立たなかったのです。

今でいう「強度行動障害」の子どもに叩かれ、蹴られながらも辛抱強く子どもとかかわり続けた病棟スタッフや分教室の教師のことを、折に触れて思い出します。どうしてあれだけの献身的な治療・看護、そして教育的態度を持ち続けてくれたのでしょうか。今では考えられない素晴らしい仲間たちでありました。すべてのスタッフにこころから感謝しています。

私たちには北海道の自閉症の子ども達のためにという熱い思いと使命感、そして高い「志」があったのです。そこからは多くの優れた児童青年精神科臨床医や研究者が輩出され、まさにわが国における児童青年精神医学界の一角を占める活動を展開してきました。

このような半世紀にもわたる赫々たる歴史を持った「札幌市児童心療センター（旧市立札幌病院静療院児童部）」が、今や存亡の危機にあることを知り、わが耳を疑いました。どのような理由があって、どのような経緯によってこのような状況に至ったのかはわかりませんが、新聞報道やインターネットの記事による情報からは、次のような問題があったのではと推察されます。

- 1) 静療院成人部が市立札幌病院の本院に移転し、札幌市児童心療センターが保健福祉局の所管となり、診療体制や当直体制などの課題を有する医療現場の実態をよく知らない本庁の方々が机上の戦略によって計画を建てたことが問題の発端ではないのかと思われまます。
- 2) さらに、2014年春には関連する福祉施設や発達医療センターと統合して「複合施設」とする予定があるとのことですが、インターネット上でみる「札幌市厚生委員会」（11月13日）の記録によると、事務方と現場医師との意見の対立があり、児童診療センター長を事務方の医務監が兼務したことで、その溝が一層深まったようです。
- 3) 「複合施設」構想は、医療と福祉の連携という大儀名分からすると理想的なものです。それを実行に移す場合には、医療関係者と福祉関係者、さらに保健福祉局との綿密な実りある検討が重ねられ、三者が納得した上で実行に移されるべきものです。とくに問題となるのは、「複合施設」を動かすシステム（とくに複合施設長を誰にするのか）をどう整えるのが最大のポイントです。

以上の3点を思いつくままに列挙しましたが、札幌市としては初心に帰り、関係するスタッフ間の綿密な協議を早急にやり直してはいかがかと思っております。

前述した「静療院児童部創設時の苦労」を思い返し、何度も危機的難関を乗り越えてきた先輩の一人として言わせて頂ければ、「札幌市児童心療センター」は誰のためにあるものなのかを今一度、考えて頂きたいのです。私も静療院に在職中、市当局や病院事務方との議論の中で涙を流したこともありました。しかし、「札幌市児童心療センターは、自閉症をはじめとする発達障害を有する子どもや人々のためにあるもの」ということだけは、こころに留めておいて頂きたいのです。

自閉症をはじめとする発達障害を有する子どもや人々の幸せを守るという一点にかけて、私は（社）日本自閉症協会の活動を行っておりますが、札幌の皆様も志を高く掲げて健闘して頂けることをこころより願っております。

以上